（日本、アメリカ、タイ、中国）
2023 年 3 月

世界をつなぐ日本語プロジェクト
―動画の制作・発信活動を通した日本語学習―

友宗朋美（筑波大学大学院生）
薛安捷（筑波大学大学院生）
陳雨詩（筑波大学大学院生）
大竹春菜（筑波大学大学院生）

１．はじめに

本プロジェクトは、海外の日本語学習者が国の文化や習慣を捉えた映像を作成・発信し、初級段階から日本語を使用した相互交流ができるプラットフォームの構築を目的としている。

筆者ら（以下、プロジェクトメンバー）は大学や中等教育機関、塾などの日本語教育機関で講師やTAとして初級の学習者に日本語を教えた経験があり、学習者の動機づけとアウトプット能力の向上に課題を抱えていた。筆者らの海外における日本語学習経験および先行研究によると、学習者は授業以外の時間で日本語に触れる機会が少ないため、教室で学んだ日本語を実生活と結びつけることが難しいという問題があった。そこで、実際の日常生活の場面の映像素材を活用することで、初級学習者であっても日本語を使い自分自身を表現する機会を生み出すことができ、楽しみながら主体的に学習に取り組めるのではないかと考えた。

また、本プロジェクトは、活動を通して動機づけを高め、社会的な交流による日本語運用能力の向上を目指している。池田（2002）は、映像活用は学習者の感動や興味を引き起こす情意領域に教育効果があると述べ、映像を効果的に用いることで文化や習慣を理解し、学習動機を高め、効果的に日本語を学ぶことができると述べている。このように、日本の文化等を伝える映像の提供と学習者自らの文化等の発信・交流により、初級学習者の動機づけおよび持続的な日本語学習の実現が可能であると考える。海外の学習者が授業以外の場でも日本語が使えるよう、興味と達成感を感じながら日本語を学び続けられる環境の構築を考え、本プロジェクトの活動を展開した。

２．プロジェクトの概要と流れ

本プロジェクトでは「オンライン掲示板アプリPadlet」（以下、Padlet）を主に使用し、アメリカの大学2校・中国の大学1校・タイの中等教育機関1校・日本の大学1校の教育機関と連携し、2022年8月から2023年2月にかけて行なった。プロジェクトの流れは、以下の通りである。

①サンプル動画の作成：プロジェクトメンバーらがサンプル動画を作成し、Padletに投稿する。サンプル動画は国の文化や食べ物などについて初級レベルの日本語を用いて30秒前後で説明する動画で、10本程度作成する。海外の日本語学習者が日本や各国の社会生活に触れながら言語や文化、習慣への興味と理解を深め、日本語学習の動機づけを高めることを目的とし、サンプル動画を作成する。

②共同で活動を行う海外の教育機関の教員ら（以下、海外の教員）への説明：本プロジェクトへ関心を持ち、協力を得た海外の教員3名と打ち合わせを行う。サンプル動画を見せながら、本プロジェクトの趣旨やスケジュールを海外の教員に説明する。詳しくは3-2で述べる。

③海外の学習者への説明：海外の教員が、それぞれの教育機関の学習者に本プロジェクトの説明をする。プロジェクトの趣旨やスケジュール等についての説明、サンプル動画の視聴促進、資料の配布を行ってもらう。

④学習者の動画作成と投稿：学習者のアウトプット能力を高めるため、学習者に動画作成をしてもらう。テーマの選択や動画の長さ、動画編集にかける時間などは学習者自身が自由に選択できるので、学習者は自身の興味・関心・特技を活かしてプロジェクトに参加する。

⑤学習者のコメント交流：海外の教員に、動画の発信と交流が他国の日本語学習者と繋がる機会となることも伝えてもらい、コメント欄での交流も促してもらう。

⑥振り返り：学習者を対象にしたアンケート調査を実施する。また、海外の教員と意見交換を行い、学習者が動画の制作・発信活動を通してより効果的に日本語を学べる環境作りに必要な要素を検討する。さらに、アンケートの調査結果や動画の分析を行い、海外の教員とともに今後の活動の展開を検討する。

表1は、本プロジェクトのスケジュールである。

表１　スケジュール

期間	活動内容
8 月	・Padlet ページ作成 ・スケジュール作成
9 月	・サンプル動画作成 ・補助資料の作成 ・サンプル動画の Padlet への投稿 ・海外の教員との事前ミーティング
10 月～12 月	・動画募集・コメント交流 ・投稿された動画とコメント管理 ・学習者への事後アンケート作成
11 月～12 月	・学習者への事後アンケート実施
1 月	・動画とコメントの分析 ・学習者へのアンケート分析 ・海外の教員との事後ミーティング
2 月	・来年度の活動の検討

事前・事後活動を含む全体の活動期間は2022年8月から2023年2月であるが、学習者による動画投稿・コメント交流の期間は、それぞれの教育機関の学年暦を考慮し10月から12月に設定した。

３. 事前準備とミーティング

３−１　事前準備

本プロジェクトは、授業外での日本語の使用を促すことも目的の１つである。そこで、教員の負担を減らし、学習者が授業外で活動に参加しやすい環境を整えるための資料（以下、補助資料）を作成した。補助資料は、ポスター（図1）、動画作成説明書（図2）、Padletの使い方説明書（図3）の3つである。教員のサポートが最小限であっても必要な資料にアクセスしプロジェクトが進められるように、QRコードを掲載したり、やさしい日本語と学習者の母語を併記したりした。

図1　使用したポスター

図2　動画作成説明書の一部

図3　Padletの使い方説明書の一部

３−２　事前ミーティング

動画投稿を募集する前に、海外の教員とオンラインで事前ミーティング（以下、事前MTG）

を行なった。事前MTGは、本プロジェクトの目的や流れを伝えるだけでなく、海外の教員らとプロジェクトメンバーが一堂に会し、国を跨いだプロジェクトであることが実感できる重要な場でもあった。事前MTGでは、自己紹介を行った後、海外の教員に本プロジェクトの趣旨と目的を説明し、動画の公開範囲と公開期間、スケジュール、補助資料、使いやすい事後アンケートのツールなどを確認した。また、学習者の関心を高めるサンプル動画を作成するために、動画のテーマや撮影場所などの希望も聞き取った。加えて、海外の教員はPadletを使用した経験がなかったため、Padletを実際に体験してもらい、学習者への伝えやすさにも配慮して進めた。

４．活動の様子

事前MTG後、10月から12月にかけて学習者による動画投稿・コメント交流を行った。本節では、実際の活動の様子としてタイの例を取り上げて報告する。

４-１　活動先

タイでは、プロジェクトメンバー1人の勤務先である現地の公立中等教育機関で活動を実施した。参加者は第二外国語として週に3～4コマ日本語を履修している中学1年生～高校2年生、5クラス計17名である。学習者は英語で授業履修をするプログラムに所属しており、全員英語が堪能である。日本語は大半が入門レベルであった。

４-２　活動の過程

活動は2022年11月に3週間実施した。表2は、活動の流れである。

表2　活動の流れ（タイ）

週	内容
1週目	・活動の趣旨説明 ・サンプル動画視聴、コメント ・スクリプト作成
2週目	・動画撮影 ・Padletに投稿
3週目	・クラスメイトの動画視聴 ・コメントを読む、返答 ・振り返り

始動時期は後期の授業開始後2週目で、各クラス週50分前後を活動時間とした。導入、スクリプト作り及び振り返りは授業時間内に行い、2週目の動画撮影は課題として各自が授業外の時間に実施した。

まず、1週目は、プロジェクトメンバーが作成した補助資料を使用し導入を行った。その後、サンプル動画を視聴しそれらにコメントをしてみることで、活動のイメージを具体化していった。また、上述の通り入門レベルの学習者であることから、日本語を使って動画を作成するにあたり言語面での支援が不可欠であった。よって、初級学習者用の日本語リストとワークシートを配布し、動画撮影の計画立てとスクリプト作成に活用した。自身の知っている言葉や日本語リストの表現を組み合わせながらスクリプトを作成した学習者もいれば、言いたいことを英語で記述し、教師とともに日本語に訳していった学習者もいた。日本語で言えることは日本語で、詳細は英語で説明するというスタイルをとった学習者もいた。

2週目は授業外の時間に各自で動画を撮影し、タイトルをつけてPadletに投稿することを課題とした。事前にスクリプト作成まで行っておいたことが功を奏してか、全員が自力で動画を作成することができた。【食べ物／飲み物】カテゴリーの動画が最も多く、自宅や店で好きな食べ物等を紹介している動画が多々アップロードされていた。他にも、旅行先の海で撮影したものやペットの猫について紹介したものなどがあった。動画の編集までは求めなかったが、字幕やBGMをつけて投稿した学習者もいた。

図4　動画撮影中の様子

図5　投稿された動画の一部

3週目は、授業内で振り返りを行った。クラスメイトが作成した動画をプロジェクターに写して視聴し、Padletのコメント欄に質問や感想を書き込んだ。その後、書き込まれた質問やコメントの内容を教師やクラスメイトとともに確認し、日本語リストを参考に質問に返答するよう促した。最後に振り返りとしてこの活動の感想を尋ねたところ、全学年共通して「楽しかった」「（日本語で動画を作るのは）簡単だった」という声が上がった。

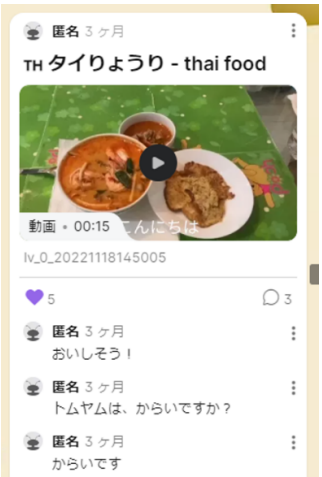

図6　コメント欄の一例

4-3　タイでの活動を振り返って

当初、入門レベルの学習者にとって本活動は難しすぎるのではないか、成立しないのではないかと懸念していた。コメント欄での相互交流などが活発に行えなかった点はあったものの、補助資料の準備やスクリプト作成のサポートを行うことで活動に取り組みやすくすることができた。また、5秒～1分程度という動画の短さや、シンプルなものでいいという声掛けも日本語を使うハードルを下げることに役立ったと考える。学習者からのアンケート回答にも “This project has made me become more confident in using Japanese. At first, I was scared that my Japanese won’t be that great, but I've become more confident in my Japanese since then.” という記述があり、本活動が多少なりとも自信向上に良い影響を与えたのだと捉えられる。

本節ではタイの中高生による活動の様子を報告したが、アメリカでは日本語専攻の大学生が参加しており、授業内外でのプロジェクトの扱い方や教師の介入度合いが異なっていた。学習者の年齢や日本語レベルに合わせて活動の仕方を調整することで、幅広い層の学習者を巻き込むことができたのだと考えられる。

５．成果

本節では、本プロジェクトで投稿された動画および活動に参加した学習者からのフィードバックについてまとめる。

５－1　Padlet に投稿された動画

Padlet には、アメリカ、タイ、日本から平均およそ 25 秒、総計 50 本の動画が投稿された。動画には計 132 のコメントが寄せられ、230 個の「ハート」（図 6 中央左側）がつけられている。投稿には 8 つのカテゴリーを設けており（表 3）、【食べ物／飲み物】【学生生活】【建物／自然／名所】など学習者の身近なテーマや地域の特色のあるものの人気が高かったと言える。

表 3　Padlet に投稿された動画の状況

カテゴリー	動画数	平均長さ（s）
食べ物／飲み物	16	18.8
学生生活	12	31.3
建物／自然／名所	9	21.6
その他	5	27.4
交通	3	23.3
文化	2	11
イベント	2	26.5
お店	1	42
全体	50	25.2

コメントの表記に注目すると、ひらがなと漢字混じり、ひらがなのみなど 5 つの種類があった。

表 4　動画コメントの一部

種類	コメント例
ひらがな漢字混じり	ありがとうございます。コスチュームじゃなくって大きいぬいぐるみです。私が作りました。
ひらがなのみ	らくごはおもしろいですか？
ローマ字	tabetai desu
英語	I want to try it! Did you made it in your home?
日本語と英語併記	にほんごでかきますか？英語のおみくじがありますか（Is it Written in Japanese? Does they have English omikuji?:))

母語や英語など日本語以外のコメントも可というルールを設定していたが、全体的に日本語によるコメントが多く投稿された。プロジェクトへの参加が、日本語を使ってみようという気持ちを喚起したのではないかと推測する。

５－２　事後アンケート

本プロジェクトに参加した学習者を対象に、2022 年 11 月から 12 月にかけて、Padlet 利用の頻度や活動がもたらす変化や感想などについてアンケート調査を行い、20 件の回答を得た。まず、Padlet の利用回数については、20 名中 9 名は 1 回だけ、10 名が 2~5 回、1 名が 6~10 回であり、動画の視聴や投稿、コメント投稿を行っていた。Padlet はユーザー登録をせずに使えるため気軽に参加できるというメリットはあるが、コメントの通知がされないことからコメントへの返信は促進されにくかったと考えられる。活発なコメント交流にはさらなる工夫が必要である。

また、5 段階のリッカート尺度を用い、表 5 に示す 5 つの項目についての意見を尋ねたところ、各項目は平均的に高い評価を受け、全体的な満足度は 4.5 に達した。特に異文化理解では高い評価を得ており、今回の活動を通して他国や日本の文化を知ることができたという声もあったことから、本プロジェクトが目指す国際的な交流プラットフォーム構築の効果が見られた。

表 5　活動参加に関する評価の平均値

質問項目	平均値
(1) 日本語への興味が高まった。	3.9
(2) 日本語を使うことへの自信が高まった。	3.6
(3) 日本語を学ぶ役に立つと思う。	4.1
(4) 異文化を知るために役に立つと思う。	4.4
(5) このプロジェクトに満足している。	4.5

また、「このプロジェクトはどうでしたか。自由に書いてください」の自由記述のコメント欄には、表 6 のコメントがあった。これらのコメントからも、本プロジェクトに参加した学習者は楽しみながら活動ができたと考えられる。

表 6　自由記述の一部（原文ママ）

It’s a short and fun activity to participate in ;)
Very cute and great idea!
I love this project it helps me a lot about Japanese
I am grateful that people commented on our videos
I liked that I could practice how to use Japanese in my daily life.
It allowed me to take a look at my school in way I hadn’t before.
It is nice, love viewing all the delicious food from Japan, making the first video make me a little be nervous. However, after doing it, it bring me huge satisfaction. I truly enjoy this project
I really liked how many different categories there were and how many people living in different areas were able to describe something as part of their culture in Japanese.

６．事後ミーティング

活動終了後、共同で活動した海外の教員と振り返りのためのミーティングを行い、学生の様子、実施方法、活動期間と時期、活動中困難であった点、今後の計画について意見交換をした。

まず、本プロジェクトに参加した学習者の様子を聞いたところ、活動に参加した学習者は撮影内容を考え、互いにサポートし合い、難しさはありながらも楽しそうな様子であったと報告があった。Padlet に投稿された動画とそのコメント欄は授業でも活用され、クラス全員で動画

を見たりコメントを読んだりしていたとのことであった。

次に、活動形式について聞いたところ、今回の活動は「主に授業でアナウンスして学習者が自主的に参加する」または「クラス全体に向けて授業の一環として取り入れる」という 2 つの形式で実施されていた。中国の学習者に対しては前者のアナウンスのみの形で実施したが、新型コロナウイルス感染防止のための行動制限によって自主活動の参加を促すことが難しく、学習者からの動画投稿がなかった。このことからも、教室外でも活用できることを意識して計画・実施したが、やはり完全に授業外のプロジェクトにするのは難しく、教員の促しやサポートは重要な役割を果たすことがわかる。

全体に対する意見としては、一定の効果はあったものの、改善が必要な点もあった。例えば、動画投稿に関しては、日本語を話したりスクリプトを考えたりすることで日本語使用の機会を生み出すことができた。ただ、技術面では 30 秒程度の短い動画の作成にも時間と工夫が必要で、動画投稿の形では参加しにくいと感じた学習者もいたと聞いた。しかし一方で、日本語の能力だけでなく動画編集を得意とする学習者にとっては活躍できるいい機会となったとコメントもあった。そのため、今後は動画のみではなく写真とキャプションによる投稿も含めて、学習者自身が自由に選択できる幅の拡大を検討する。

他にも、「交流」を目標とする点からコメント欄の使用状況をみると、初級の学習者にとっては理解しにくい言葉も多く、日本語の文字が読めない学習者もいたこともあり、交流の盛り上がりには至らなかった。さらに、動画とコメントからのみでは国籍を見分けにくく、参加者の顔が見えないことから他国の学習者も参加している実感を持ちにくいため、交流のリアル感が足りないという課題も見つかった。また、海外の教員にとって活動の趣旨をうまく学習者に伝えることは難しく、活動の趣旨の伝え方にはさらなる工夫が必要だという意見もあった。今後この点についても対応を検討し、より活動の効果を高めていきたい。

7． まとめ

本プロジェクトは、学習者の動機づけと日本語学習に役立つアウトプットの場の構築において効果が見られた。また、日本語使用への興味や自信向上の面でも一定の役割を果たしている。学習者のアンケートでも全体的満足度が高く、異文化理解の役に立つ活動であったと評価された。海外の教員からも、動画投稿期間も適切で、効果が感じられたことから、今後も継続的に参加したいというコメントを得た。

また、本プロジェクトを通して、多くの海外の学習者や教員とつながり、さまざまな観点からのフィードバックを得ることができた。今後はさらなる交流の活発化に向けて、フィードバックで明らかになった課題を改善する。そして、海外の初級日本語学習者が授業で学んだ日本語をよりリアル感をもって使える場の構築を目指し、活動を発展させていく所存である。

参考文献

(1) 池田伸子（2002）「第 5 章 映像と日本語教育」城生佰太郎（編）『日本語教育学シリーズ 第 6 巻 映像の言語学』おうふう, 161-192.